# CSR REPORT 2019

関西テレビ放送 CSR報告書2019

8/カンテレ

## 目 次


CSR活動の基本方針 / CSR活動 3つの柱 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 01
「はじめに」 代表取締役社長 福井澄郎 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 02
心でつながるプロジェクト ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 03

**CHAPTER 1　地域への貢献活動**

カンテレ開局60周年記念 ラインナップ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 04
座談会「**開局60周年は誰のため、何のため?**」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 06
『BRIDGE はじまりは1995.1.17神戸』 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 08
『第38回大阪国際女子マラソン』/「フェルメール展」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 09
「声なき声によりそって」/「3000人の吹奏楽」/「文楽、始めよう!!」 ・・・・・・・・ 10
「iPS細胞を使った新しいがん治療研究の今」
防災番組が目指すところ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
座談会「**災害報道を巡る地域への想い、社員への願い**」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12

**CHAPTER 2　子どもたちの未来のために**

カンテレ社内見学 / 映像制作支援・学びアイ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
出前授業 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16
アートを身近に / 関西テレビ青少年育成事業団 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18
児童虐待防止協会 /「親子で抱っこ 地域で抱っこ」 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19

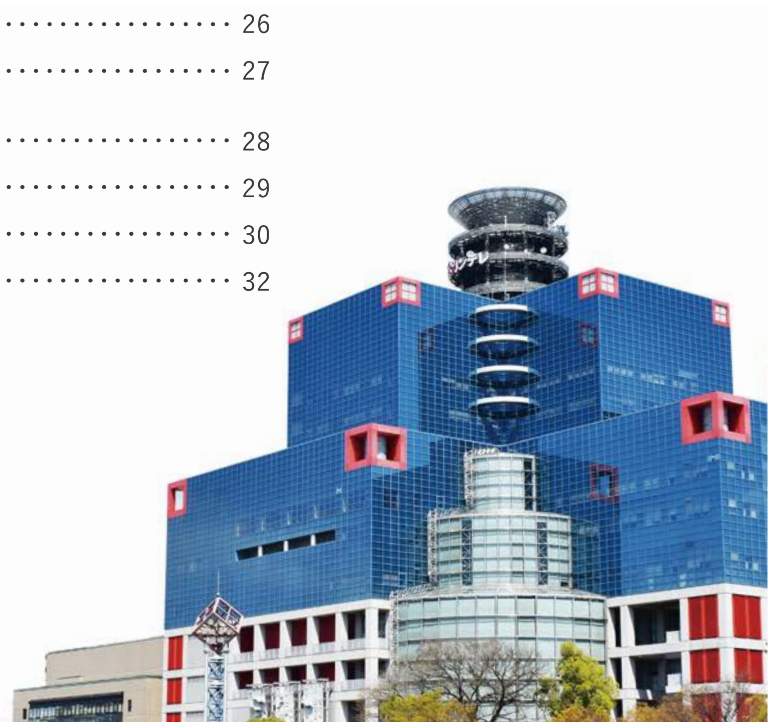
**CSRスペシャルリポート**

座談会「**関西テレビの“顔”としての責任と使命感**」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20

**CHAPTER 3　人権を守る**

FNSチャリティキャンペーン ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
ザ・ドキュメント『さくらの国に来て・・・』/『ふたつの正義』/『ファミリー』 ・・・ 23
放送のバリアフリーを目指して リアルタイム字幕 / 字幕キャッチャー ・・・・・・・ 24
自社検証番組『カンテレ通信』・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
「番組は全社員が共有を」上村洋行 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
「オンブズ・カンテレ委員会に寄せて」鈴木秀美 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27

CSR推進局のお仕事 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
CSR活動 月次カレンダー ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
カンテレのSDGs ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30
「61年目を迎えたカンテレ」 専務取締役 CSR担当 宮川慶一 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
会社概要 / 関係会社 / 関西テレビ視聴可能エリア

## CSR活動の基本方針

関西テレビは子どもたちの健やかな成長を応援するため、ニュース番組を通じて児童虐待防止キャンペーンを展開すると共に、「児童虐待防止協会」の設立に協力し、現在も支援を続けています。また、ユニセフと協力して世界の子どもたちを支援する「FNSチャリティキャンペーン」の実施や、キャンプ体験を通じて青少年の健全育成を目指す「関西テレビ青少年育成事業団」の設立など、さまざまな社会貢献活動を続けてきました。

しかし、2007年に番組捏造問題*をひき起こし、これを機に私たちは「関西テレビ倫理・行動憲章」を定めました。憲章では「公共の福祉と文化の向上、社会正義の実現を通じて健全な民主主義の発展に寄与する」と再確認しました。

さらに「放送の公共的使命を深く自覚し、国民の知る権利に奉仕するため、また視聴者の楽しみと満足のために、報道・表現の自由を行使すること」「人間の尊厳に敬意を払い、差別を行わず、人権を守ること」を誓いました。これに則って地域情報・災害情報・エンターテイメント番組を日々エリアの人たちに届けています。

同時に私たちは「企業市民としての社会的責任として放送・イベントなど事業を通じて社会全般に対する貢献活動を行い、社会問題の解決に自発的に取り組む」と約束しました。その実践として社内横断の「心でつながるプロジェクト」を立ち上げ、視聴者との相互理解を通してメディアリテラシー向上や地域貢献活動に努めてきました。

その歴史的経緯を踏まえ、CSRの活動方針を以下の3つとします。

## CSR活動 3つの柱

**地域への貢献活動**

地域に愛されるテレビ局として地域の情報を発信し、文化や歴史を守り、環境を大切にして、地域と地域、人と人をつなぎます。

**子どもたちの未来のために**

子どもは未来そのものです。子どもたちを社会全体で見守り、次の時代を担う世代として大切に育てる。そんな活動をサポートしていきます。

**人権を守る**

基本的人権を守るために報道・言論の自由が付託されていることを自覚し、社会的弱者に寄り添い、誰もが幸せに生きやすい社会をめざします。

＊2007年1月7日に放送された『発掘!あるある大事典Ⅱ』で番組内容のデータやコメントが捏造された問題

# はじめに

2018年、関西テレビは開局60周年を迎えました。その間、関西テレビ、あるいはテレビは、常に時代と向き合い、時代のにおいを嗅ぎ取り、時代の合わせ鏡のように時代と共に生き、失敗もし、成長してきたように思います。関西テレビのCSR活動もひとつひとつ経験を積み重ね、「地域への貢献活動」「子どもたちの未来のために」「人権を守る」の3つを基本方針として活動を続けてきました。

開局60周年にあたっては、さまざまな特別番組やイベント、11月に開催した『カンテレ8ppy大感謝祭』などを通じて、「カンテレは元気に育っています」という明るいメッセージを送ることができました。

一方2018年は、地震、台風、豪雨といった自然災害が関西を直撃し、甚大な被害をもたらしました。テレビは地域にとって、視聴者にとってのライフライン、重要な情報源です。関西テレビは災害直後から正確な情報を発信してきましたが、これからも地域と視聴者の生活に深く思いをめぐらして、必要な情報を丁寧に伝える努力を怠らず、今回の災害から学べることは教訓として総括し次に備えていきます。

さて、関西はこれから大きく動きます。2019年にはG20、ラグビーワールドカップと大きなイベントが続きます。2025年には大阪万博が開催されます。関西テレビはコンテンツメーカー、エンターテインメント企業として、喜びや感動、情報を視聴者にお届けしていきます。

私たちは、信頼できる報道番組と情報番組、面白いドラマやバラエティーを送り続けることが使命です。そしてCSR活動は社会貢献や支援活動を通じて「社会と共に歩んで行く」ための本業である放送と並ぶ大切な両輪です。

関西テレビはこれからも、地域と視聴者に寄り添い、つながりながら、社会に貢献し続ける企業として歩んでいきたいと思います。

関西テレビ放送株式会社
代表取締役社長
**福井澄郎**

**関西テレビのメディアリテラシー活動で重要な役割を果たしているのが、各部局の社員がメンバーとなる「心でつながるプロジェクト」です。メディアリテラシーをテーマに文字通り視聴者と心でつながる活動を企画してきました。月1回の会議を軸に“ボトムアップ型”の活動を展開しています。**

『発掘！あるある大事典Ⅱ』問題を機に視聴者からの信頼を回復し、視聴者と心でつながることを目的に、2007年に立ち上げたのがこの「心でつながるプロジェクト（以下、心PJ）」です。

視聴者の情報を受け止める力（メディアリテラシー）と私たちの送り手側としての伝達能力の向上に資する活動を行う組織です。以来、視聴者と心でつながるためにさまざまなイベントや企画を実施し、「出前授業」や「映像制作支援・学びアイ」など今に続くものも少なくありません。

そして2018年度、新たなプログラムとして「カンテレ社内見学」を4月からスタートさせました。（詳細は15ページ参照）

また、2019年度の心PJでは、「防災@カンテレ 片平さんとみんなで学ぼう！防災の知恵」をテーマに、防災・減災を目的としたイベントを5月に開催すべく動き出しました。なんでもアリーナ、インタラクティブエリアなど本社1階のオープンスペースに視聴者を招き、『報道ランナー』でおなじみの気象予報士・防災士の片平敦さんが、テレビメディアからの防災情報の活用方法など“防災リテラシー”を高める授業をします。

心PJは、視聴者の信頼に応え、メディアリテラシーをテーマに、放送・イベントなどを通じて社会と地域に貢献する取り組みを続けていきます。

詳細はコチラ

**2018年度メンバー（6月～）**

前田ひとみ（CSR推進局）/ 木村昭仁（経営戦略部）/ 池尾 徳（視聴者情報部）/ 加藤麻衣（財務経理部）/ 水俣清一（総務部）
伊藤万里子（～3月 労政部）/ 山村 愛（4月～ 労政部）/ 春田享子（業務部）/ 藤井大輝（コンテンツ事業部）/ 古谷 陽（事業部）/ 和泉 亮（編成部）
秋田成子（宣伝部）/ 若田部克彦（アナウンス部）/ 豊田康雄（アナウンス部）/ 水戸 徹（制作部）/ 毛阪一洋（美術部）/ 井筒慎治（報道センター）
片野正徳（報道映像部）/ 山田恭弘（スポーツ部）/ 松尾成泰（制作技術センター）/ 青木 満（制作技術センター）/ 宮島祥晃（ITソリューション部）

オブザーバー：石巻ゆうすけ（青少年育成事業団）
事務局：CSR推進局 放送文化推進部

各部局のメンバーが集まる「心PJ」会議

# ありがとう！そしてこれからも！

関西テレビは、2018年11月22日、開局60周年を迎えました。60周年を記念して、さまざまなイベントや事業を開催、特別番組を放送しました。関西テレビはこれからも、視聴者の皆さん、地域の皆さんに愛され、信頼される放送局をめざします。

## カンテレ開局60周年 記念イベント

- タクフェス 春のコメディ祭「笑う巨塔」（3月29日～4月30日）
- 「バーン・ザ・フロア Joy of Dancing」（5月17日～5月28日）
- 第58回「3000人の吹奏楽」（6月23日）

- 開局60周年！カンテレ8ppy大感謝祭（11月17日・18日）

- 「Livejack SPECIAL 2018」（11月24日・25日）

- 「カンテレグルメ大博覧会」（2019年3月11日～3月19日）
- 「フェルメール展」（2019年2月16日～5月12日）
- 色彩の画家「オットー・ネーベル展」シャガール、カンディンスキー、クレーとともに（4月28日～6月24日）
- シルク・ドゥ・ソレイユ「ダイハツ キュリオス」大阪公演（7月26日～11月4日）

- 舞台「サメと泳ぐ」（9月1日～10月4日）
- ミュージカル「ハル」（2019年4月1日～4月28日）

## カンテレ開局60周年 記念事業

- カンテレ社内見学（4月～）
- FNSチャリティキャンペーン カンテレアナウンサー朗読会Vol.17「LIFE！～新しい1ページ～」（9月2日）

- カンテレキッズスタジオ（8月13日・20日・27日）

- ハチエモン駅長登場！

- カンテレ社屋に遊びに来てね！

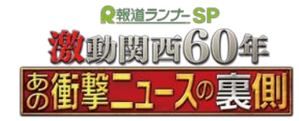
- #8ppyカンテレ写真投稿キャンペーン

## カンテレ開局60周年 特別番組

- ちゃちゃ入れマンデー もう嫌いなんて言わせない！関西って素晴らしいんやで！ 2時間SP（1月9日）
- 60超えてお初です（1月20日）

- テレビ見墳記 ～ご近所古墳を味わうひととき～（3月18日）
- 10周年だよ！にじいろジーン 世界で大変身SP!! ハリウッド女優マル秘プライベートから豪邸リフォームまで全部見せます！（3月20日）
- 池上彰の関西人が知らないKANSAI（3月20日）
- アナウンサー物語24時（2月25日）
- 報道ランナーSP 激動関西60年 あの衝撃ニュースの裏側（4月17日）

- 大阪アースダイバー ～ケンコバ的 歴史発掘手帖～（5月26日）
- 鶴瓶&なるみのテレビのコト聞いてみよ！（6月30日）




- THE ICE☆プラマヨのフィギュアオールスター夏祭り（8月4日）
- よ～いドン！THEゴールデン（7月24日）
- 関ジャニ∞のジャニ勉 先輩に学ぶ頑固道SP（8月25日）

- ハチネンマデ～若手が企画の種から考えました～（9月29日）
- 胸いっぱいサミット！生激論（11月10日）
- 開局60周年！カンテレ8ppy大感謝祭 よ～いドン！ 開局60周年SP（11月17日）
- 開局60周年！カンテレ8ppy大感謝祭 おかべろ2時間半生放送SP（11月17日）
- 開局60周年！カンテレ8ppy大感謝祭 地獄も悩みも笑ってふっとばせ！ウラマヨ！&モモコのOH！ソレ！み～よ！合体2時間SP（11月17日）

- 開局60周年！カンテレ8ppy大感謝祭 ちゃちゃ入れマンデーが白黒つけてスッキリさせまっせ～SP（11月18日）
- 開局60周年！カンテレ8ppy大感謝祭 コヤぶるッ！SPORTS（11月18日）
- 開局60周年！カンテレ8ppy大感謝祭 競馬BEAT（11月18日）
- それ行け！ハピはちワゴン ～ありがとうを届けませんか？～（11月12日～16日）
- 開局60周年！カンテレ8ppy大感謝祭 豪華ゲストが大集合！表も裏もぶっちゃけまくりで幸せにしまっせ～！SP（11月18日）
- なめとんか やしきたかじん誕生物語（11月20日）

- 一緒に熱くならないか！～プロと10代の情熱ステージ～（12月9日）
- Livejack SPECIAL2018（12月16日）
- BRIDGE はじまりは1995.1.17 神戸（2019年1月15日）

- 奥村組スポーツスペシャル 第38回大阪国際女子マラソン（2019年1月27日）
- 僕が笑うと（2019年3月26日）

# 開局60周年は誰のため、何のため？ 視聴者ファーストを貫いて見えた新しい景色

開局60周年記念座談会

「カンテレ8ppy大感謝祭」を中心に、多彩な取り組みに挑んだ開局60周年プロジェクト。
これからの関西テレビがどうあるべきか、携わったひとりひとりがその答えを見出す機会となりました。

## ブレストを重ねてたどり着いたのは視聴者への感謝という方向性

**島本：**関西テレビの長所・短所は何なのか。開局60周年の成功とは何か。周年プロジェクト（以下周年PJ）の発足当初は、とにかくそんなブレストを重ねました。また、最近チャンネルを合わせてもらえない局になっているのでは？という意識もあって、関西テレビのブランドをもう一度考え直す機会にしたいという思いも根底にありました。

**佐滝：**私は55周年の際も周年PJに携わっていたのですが、個人的には5年に1回というタイミングでイベントを行うのが正解なのか、他にやるべきことがあるかもしれない、というところからのスタートでした。

**島本：**そこは何回も議論しましたよね。過去の周年PJは「全社員の一体感」と「視聴者の皆さまへの感謝」という2つの軸があったように思うのですが、今回は、とにかく視聴者に喜んでいただこう、視聴者ファーストでいこうと。その結果として社員も盛り上がったらいいよね、と方向性が決まっていきました。

**加藤：**開局生ワイド特番の依頼があった際も、視聴者への感謝が第一義だということでした。ただし、プレゼント大放出！というようなやり方ではなく、イベント会場に来ていただいて、直接カンテレを感じていただくことで、感謝したいと。周年PJメンバーの想いが終始ブレることなく、コンセプトもきちっと決めてくださったので、それならこうしましょうと、一丸となって番組づくりに取り組むことができました。番組プロデューサーの梅田さんが周年PJメンバーの一員だったことも大きかったと思います。

**佐滝 昌彦** 事業局 事業部
過去の周年プロジェクトを経験し、開局60周年ではイベントを担当。

『報道ランナー』のブースで

**加藤 麻衣** 制作局 制作部
梅田氏とともに番組担当プロデューサー。

**梅田 一路** 制作局 制作部
開局60周年プロジェクトメンバー兼番組担当プロデューサー。

## 予想を上回る約35,000人が来場 お客さまにも社員にもうれしい2日間に

**梅田：**イベント会場からの生放送で工夫したのは、極力VTRを無くした点です。客席だけでなく、ブースに来られた方から一斉にステージが見える構造だったので、ただじっとVTRを見るのではなく、番組の“動き”を楽しんでいただけるものにしました。いつもは画面の向こう側にいて姿の見えない視聴者の皆さまがリアルに自分たちの作ったものに対して笑ってくださっている。この方々に支えられているんだということを、あの場にいた社員は実感できたと思います。35,000人近くのお客さまに来ていただけるとは思っていなかったので、手応えは大きかったですね。

**加藤：**視聴率は私たちが思ったように出ないこともありますが、遠い会場まで足を運んでくださったお客さまの数は、イベントに魅力を感じていただいた証。そういう意味で、来場者数が目標を超えたと聞いた時は、素直にうれしかったですし、ただただありがたかったです。

**佐滝：**社内の話で言うと、今回はこれまで以上に横断感・一体感がありました。編成局を中心に各部署が連携しあって、とてもやりやすかったです。

**島本：**社内から100人くらい応援が来ていたのですが、イベントが終わった後に、「視聴者の方々の喜ぶ姿を見ることができて本当に良かった」というメールがたくさん届きました。それから、ツイッターに「スタッフがすごく温かいイベントだった。カンテレさんて、こういう局だったんだなと、ほっこりしました」と書いてくださった方がいて、この一言だけでもやってよかったと思いましたし、とても救われました。

歩いて番組を見ることもできました

開場前の打ち合わせ

## 地域、視聴者、関西テレビ このつながりを継続していくために

**島本：**これまでで一番、地域の方々にどうしたら喜んでいただけるかを考えた周年PJだったのではないでしょうか。宣伝部の発案で社屋そのものを楽しんでいただけるようリニューアルしたり、最寄りの駅に駅長に扮したハチエモンのオブジェを置いたり、地下鉄の構内アナウンスで当社のアナウンサーの声を流したり。小学生に番組を体験してもらう「カンテレキッズスタジオ」も好評でした。見て触れて関西テレビを感じていただける1年間にしたいね、と周年PJメンバー同士で話していたのですが、思い描いていたような取り組みができたのではないかと思います。

カンテレキッズスタジオ

**佐滝：**もっと関西テレビを好きになっていただきたい、という気持ちがベースにあるので、「カンテレキッズスタジオ」などは私もいいなと思いました。そうした取り組みを今後どう継続していくのか。61年目以降を含めて考える周年PJでもあったと思います。

**島本：**本当に、これで終わっては意味がありません。視聴者ファーストの布石は打てたと思うので、あとは次の周年PJリーダーのリクルーティングを…。

**梅田：**島本さんの背中を見ていたので、リーダーがどれだけ大変かはよく知っています。私は現場でいい番組づくりに励みます！（笑）。

**島本 元信** 編成局 編成部
2016年より2年半にわたり開局60周年プロジェクトリーダーを努める。

開局60周年特別ドラマ

# BRIDGE はじまりは1995.1.17神戸

## カンテレが阪神・淡路大震災を描くことの責任

1995年1月17日、私は当時中学二年生で、大阪市内の実家に暮らしていました。幸い、私自身や家族は大きな被害を受けませんでしたが、連日報道される神戸の惨状や日ごとに増えていく犠牲者の数に言葉を失った記憶があります。この企画に着手したとき、まず感じたことは、あれから24年もの月日が経とうとしているという事実への驚き。恥ずかしながら、私自身、意識せずに日々を過ごしていたんだと気づかされました。

ドラマは、甚大な被害を受けたJR六甲道駅を、わずか74日間で復旧させた人々の実話を元にした物語。60周年を機に、阪神・淡路大震災を題材にしたドラマを制作する。カンテレ社員としても、一関西人としても、これほど光栄なことはないと思う反面、この仕事は、これまで自分がやってきたどんな仕事とも違う、特別な責任を負ったものだと思いました。

阪神・淡路大震災は、決して過去の出来事ではない。語り継ぐべきものであると同時に、もう忘れさせてほしいと思っている人も、きっとたくさんいる。今も当時を鮮明に記憶している人に、家や家族を失った人に、何を感じてもらえばいいのか。

主人公のモデルの岡本啓さんは、「使命感」という

『BRIDGE』井浦 新さんと野村周平さん

言葉を繰り返し使い、当時の苦労や葛藤、地元の人々からの温かい支援に胸を打たれたエピソードなどを、とても力強く語ってくれました。あのとき、こんな思いで生きた人が神戸にいた。岡本さんの言葉は、このドラマの役割を考える上で、大きなヒントになりました。

震災からの復興には終わりがなく、今なお続いている。でも、あの震災が残したものは、嘆きや悲しみだけではない。困難な状況の中だからこそ発揮された、人間の強さや優しさがそこにはあった。制作を進める中で、このメッセージを伝えることが、カンテレがこの作品を作る意義だと考えるに至りました。

放送後、地元関西の視聴者を中心に、「当時を思い出して胸が熱くなった」「よくやってくれた」といった温かい反響をいただきました。もちろん、声なき声にも耳を澄まさなければならないと思います。それでも、多くの関西の視聴者がこの作品を前向きに受け止めてくれたことに、ホッとしたというのが、正直な気持ちです。

『BRIDGE』は、演出を手がけた白木監督をはじめ、数多くのカンテレのスタッフが一丸となったからこそ、完成させることができました。この作品が、地元関西を中心に、多くの視聴者の方々の心に届いたならば、60周年を迎えたカンテレとしての、一つの社会的役割を果たせたのではないかと思います。

制作局 東京制作部
**米田 孝**

開局60周年特別番組 第38回大阪国際女子マラソン

## 「待ってろ、東京。」生涯一度の夢をかけた戦いを生中継

今年で38回を数える「大阪国際女子マラソン」。これまで幾多のドラマが歴史に刻まれる中で、やはり外せないのが「オリンピック代表選考会」です。4年に1度、オリンピックが行われる同じ年にこのレースは日本代表を決める戦いとなります。ただ2020年の東京五輪については、これまでと異なる形で代表選手を選考するため、オリンピックの前年である今年が実質的に代表選考レースとなりました。自国開催のオリンピックに出場すること、それは現役のランナーにとって“生涯一度”の夢です。そんな夢の扉を開くことができるのか、それとも夢が途切れてしまうのか、ディレクターとしてこのレースに人生をかけるランナーたちの生き様、そして想いを伝えることだけを念頭に置いて生中継を行いました。ただ実はテレビ中継には限界があります。2台の移動中継車と3台のバイクカメラ、そして1台のヘリカメラ。それらのカメラの前にいる選手しか捉えることができません。その限界を理解したうえで、限界を感じさせない中継を行うことが我々のランナーに対する敬意の示し方だと思いますし、それが中継を行うテレビ局の地域社会への貢献の仕方ではないかと思っております。多くの反省点が残った今年の中継ですが、より良いものにできるようこれからも努力してまいります。

リタイアする福士加代子選手

スポーツ局 スポーツ部
**片山健太**

開局60周年記念事業 フェルメール展

## 現存するといわれる作品35点のうち、日本初公開を含む6点が大阪に集結

いま最も集客力のある画家、ヨハネス・フェルメール。17世紀のオランダで活躍した画家は数多くいますが、彼の人気は別格です。今回開局60周年を記念して、関西に住む地域の皆さんにも作品を直に見てもらい、楽しんでいただけるようこの展覧会を開催しました。フェルメール作品が愛される理由の一つに、写真や映像作品に見慣れた私たちが親しみやすい画面作りがあげられます。見せたいポイントに焦点を当てる画面構成によって、まるで映画のワンシーンのように私たちの印象に強く残ります。その余韻は「静けさ」とも表現され、世界に熱狂的なファンを持ちます。そしてもう一つ、フェルメールの典型的な構図である左の窓から光が差し込む室内。あれは恐らく教会の一室です。そういう目で絵を眺めると、佇む女性たちがみな神の化身に見えてきます。一方、恋愛と欲望に翻弄される女性や、意地悪そうな召使いなど、人間の俗なる部分もしっかりと描きこんでおり、気が付くとフェルメールの術中にすっかりはまっているのです。現存する作品は推定35点、そのうち6点を大阪に集めることができ、見事な画面作りとストーリー展開で人々を魅了する“映像クリエイター”フェルメールの世界をみなさんにお届けできたことは、私たちとしても大変うれしいことです。今後も関西で魅力的な美術展が開催できますよう尽力してまいります。

大阪市立美術館

事業局 事業部
**迫川 緑**

## 「声なき声によりそって」日本の地域福祉をリードする勝部麗子氏と語らう

関西テレビで放送したザ・ドキュメント『声なき声によりそって』は、コミュニティソーシャルワーカー・勝部麗子氏の目を通し、孤独死、アルコール依存、引きこもりなど、福祉制度から抜け落ちる見えない弱者に焦点を当てた番組でした。勝部氏を招いて開かれたこの講演会は、報道局の協力も得て、番組を上映した後、ディレクターがテレビで伝えきれなかった映像の裏側を解説しました。また、200人を超える参加者と意見交換をするなど、地域を大切にし、地域の課題解決のヒントにつながるものとなりました。

## 開局60周年記念 第58回「3000人の吹奏楽」

近畿の小学校から大学まで75団体、3,576人が参加したこのイベントは、“競う”のではなく演奏やパフォーマンスを“楽しむ”吹奏楽の祭典です。京セラドーム大阪という、普段の演奏会では立つことのできない大舞台に立てることも魅力なら、参加団体に一般参加者も加わり、混然とした一体感となるフィナーレも人気です。イベントの利益の一部はFNSチャリティキャンペーンの一環として、日本ユニセフ協会に寄付しています。

フィナーレ（京セラ大阪ドーム）

## 「文楽、始めよう!!」文楽三業の役割解説とミニ公演

文楽協会などと協力して、なんでもアリーナに特設舞台を設営、地域の人や子どもたち、聴覚・視覚の支援学校の生徒や家族を招待した「文楽ミニ公演」を初めて開催しました。公演が始まる前には、「太夫」「三味線弾き」「人形遣い」の3つの役割を、技芸員さんが実演しながらわかりやすく解説。支援学校の生徒たちも舞台に上がり、人形遣いなどを体験しました。ミニ公演「牛若丸・弁慶 五条橋」では耳の不自由な人のためには、手話通訳と電光掲示板に字幕を表示し、目の不自由な人のためにはイヤホンガイドで人形の動きなどを細かく解説して、文楽を体験し、楽しんでもらいました。

## CiRA×カンテレ 京都大学iPS細胞研究基金講演会「iPS細胞を使った新しいがん治療研究の今」

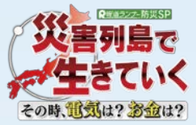
京都大学iPS細胞研究所と関西テレビが共催で講演会を開催、新しいがん治療である「免疫療法」などについて、iPS細胞の研究がどこまで進んでいるかを詳しく解説しました。京都大学の本庶佑特別教授が「がんの免疫療法」でノーベル賞を受賞したこともあり、タイムリーな講演会となりました。講演会の様子は生中継され、テレビ新広島もライブビューイングで参加。イベント終了後は、カンテレHPでも配信しました。また、インタラクティブエリアでは親子で楽しめる「今日、キミはiPS細胞ハカセになる!?」を開催し、実際のiPS細胞を見てもらうなど、科学のおもしろさを感じることができるイベントとなりました。



## 防災番組が目指すところ

報道局では毎年防災番組を制作し、阪神・淡路大震災があった1月に放送しています。去年と今年は、『報道ランナー』のスペシャル版として、防災特別番組を放送しました。1995年の阪神・淡路大震災のとき、全国から被災地に集まった多くの記者やキャスターが「この地震のことは決して忘れない」「被災地のことをずっと見続けていく」と、自らのリポートを締めくくりました。しかしその言葉通りにできている人は多くはありません。各地で頻発する大災害を思うと、それも仕方がないように思います。しかし、であればこそ、地元局として、あの震災があった1月には防災番組を放送しようと努めてきました。阪神・淡路大震災の衝撃は日本の防災を大きく変えました。我々の防災番組の原点も阪神・淡路大震災の痛み、悲しみであり、毎年続けることの根っこには地元局としての意地があるのです。

しかし、ただの意地で防災番組を放送しているのではありません。2018年はまさに災害の年でした。今後も、地球温暖化が背景にあるともみられる台風や水害、早晩起きるといわれる南海トラフ地震などに一層の警戒が必要です。テレビは災害時、情報を視聴者に届ける役割を担っていて、電気や水道、道路などと並ぶ重要なライフラインです。災害の規模、避難の仕方、水や食料のありか、避難所の状況、支援のあり方、生活再建への道筋など、すべてが命に関わる情報です。




2018年の地震や台風で、私たちは日常生活の弱点について思い知らされました。災害列島・日本で生き延びていく知恵について考えた番組です。

それを伝える役割を果たすためには、報道に携わるものが災害に関する十分な知識や高い意識を保つ必要があります。我々は普段から災害時に社会に何が起きるのかを学び、それを特番やニュース番組を通じて広くお伝えすることで、災害に強い社会づくりに貢献していきたいと考えます。

災害は地域社会を襲います。地元に密着し、地足をつけた取材を続けるローカル放送局だからこそ発信できる防災情報が、平時にも緊急時にもあるはずです。そんな情報をまじめに分かりやすく、時に興味をそそる形で、時にシリアスに、テレビ局が持つモノづくりの力を注ぎこんで送り続けたいと思っています。

報道局 報道センター
**豊島学恵**

# 災害報道を巡る地域への想い、社員への願い 相次ぐ災害に報道機関としてどう対峙するべきか？

**大阪北部地震、西日本豪雨、台風21号、関西各地に甚大な被害を及ぼす自然災害が多発した2018年。そのとき、関西テレビで何が起きていたのか、今後の災害報道のあり方も見据えた現場の声をお届けします。**

**大阪北部地震の発生は午前7時58分、通勤・通学の時間帯と重なったことで大混乱が生じました。報道をはじめ各部、どういった状況だったのでしょうか。**

**川端：**報道は編集長、当日のプロデューサー、泊まり明けのデスク、記者、カメラマンが仕事をしていました。まずは放送で震源地や震度などの情報を伝えることに集中したため、反省として取材に関しては各社に比べてワンテンポ出遅れてしまいました。

**油野：**初動が遅れたのは報道技術も同じです。具体的にどこに行けばよいのか指示を待っている間に渋滞になってしまって…。震源がどの方面かはわかっていたので、とりあえず中継車を出発させればよかったと思っています。災害を報道すること自体は業務の一つであって特別なことではないのですが、あの地震で特徴的だったのは、交通機関が麻痺して出社できない社員が多かったこと。なかなか人が集まらなくて困りました。

通勤・通学者で混雑する新御堂筋歩道

**川端 充** 報道局 報道センター 報道部長

地域の報道機関として使命を全うするためには社内体制も重要と考える。

**川端：**最初の1時間で15～20人くらいは出社していましたが、ほとんどは会社から徒歩圏内に住む若手社員でしたね。

**安東：**当日、出社できずに特別休暇扱いになった社員は90名弱。全体の15%です。当社の「非常災害ハンドブック」で夜間や休日などさまざまなケースでの災害時対応について記載しているのですが、じつはすべて“発災から3時間で駆けつける”ということを前提としています。大阪北部地震のような局所的な地震が広域な交通麻痺を起こすことを想定していないので、見直さなければなりません。

**部署の垣根を超えてフォローし合うという、ふだんはあまり見られない光景もあったそうですね。**

**川端：**午前中に総務から呼びかけてもらったのか、報道出身の営業の若手4～5人が報道のフロアに来て、ライフラインの状況などを調べてくれて本当にありがたかったです。こんな時のためにも人材交流は大事だなと思いました。

**安東：**BCPの一丁目一番地は社員の安否確認です。その司令塔となる人事担当者が早々に出社できていた点はラッキーでした。昼までにはグループ会社も含めてほぼ全員の無事が確認できたので、人手が必要な部署に人的資源を振り分ける作業ができました。

**岡 宏幸** 編成局 編成部 部長

東京支社で東日本大震災を経験。編成・制作用の災害時マニュアル作成に着手。

**川端：**そうした横の連携というのは、これまではありませんでしたね。通常の仕事は一人一役でいいかもしれませんが、特に発災直後は一人二役どころか、三役も四役もやっていかないと仕事が回らないことを痛感しました。それにしても、あれだけの交通麻痺はおそらく、阪神・淡路大震災以来じゃないでしょうか。

**岡：**関西ではそうですよね。私は東京支社勤務の際に東日本大震災を経験しているので、直感的に交通機関は麻痺するだろうし、車で行けないだろうと思いました。

**川端：**これを機にバイクや電動自転車を買ったという社員も何人かいます。

**朝の生放送番組を控えていた制作はどのような様子だったのですか？**

**近藤：**たまたま発生時すでに会社にいた『よ～いドン！』のチーフディレクターが陣頭指揮を取ってくれたのですが、番組があるのか中止なのか、なかなか編成の判断が下りなくて、ちょっとバタバタしていました。また、先ほど人的資源という話がありましたが、制作は完全に番組ごとの縦割りで、とくに地震のあった日は『よ～いドン！』以外の収録がなかったこともあって、他の番組の班の人は“今日は会社に行けないから休みになるのかな”くらいの感覚だったのではないかと思います。

**安東：**放送や報道に直接タッチしない部分でもやるべき仕事は当然あるので、状況が許す限りは出社、ということを「非常災害ハンドブック」にも書いているのですが…別の形でもしっかりメッセージしていかないと駄目ですね。

**岡：**編成は、自身や家族に何かあった場合は別として、基本的に全員即出社する体制を取っています。ローカルの生放送番組をどうするのか判断したり、今どういう状況なのか報道と連絡を取り合ったりしなくてはいけないので。東日本大震災以降、災害報道に対する意識が高くなっているので、大阪北部地震の時もフジテレビと関西テレビが話し合いをして、割とすぐに特番という形になりました。ただ、近藤さんが言われたように、制作側としては「もっと早く決めて！」という感じだったと思います。

建物倒壊現場からリポートする記者

**近藤 兵衛** 制作局 制作部 部次長

番組制作の第一線で、災害時におけるスタッフの意識向上を図る。

**災害への備えという面では、具体的にどのようなことを実施しているのでしょうか。**

**岡：**東日本大震災以降、BCP訓練や、フジテレビが万が一ブラックアウトした際にキー局の機能を担う訓練などを行っています。

**近藤：**スタジオには常にカットイン用の資料やヘルメットを置いていますし、例えば生放送中に大地震が発生し、

6月18日 大阪北部地震発生日の報道フロア

**安東 忍**　総務局 総務部 部長

災害時のマニュアルのブラッシュアップや訓練など、BCPの深化をめざす。

フジテレビと関西テレビ、どちらかのニュースがカットインで入ってくる、それが決まるまで5分かかるとして、その間を制作部の番組内で、スタッフとアナウンサーがつなぐくらいのことは制作スタッフの全員ができるよう意識付けをしています。

**川端：**阪神・淡路大震災のような直下型の地震の場合は、まずは起こったことを伝えるしかないのですが、東日本大震災を経験して、少しでも早く上手に伝えることで救える命がある、ということがわかった。そのことは大きかったと思います。

**岡：**ずいぶん意識が変わりましたよね。台風の大雨で洪水になりました、ということではなく、その後起こり得ることに対する備えの報道が多くなりました。

暴風で飛ばされ、ブルーシートで覆われた屋根

**油野：**そうですね。津波や台風は事前にわかるので、徐々に減災報道に向かっていると思います。

**川端：**西日本豪雨で大雨の特別警報が出た日に、オウム真理教事件の死刑執行という大きなニュースがありました。地域の方々に本当に必要な、今まさに迫り来る危険性を放送するというローカル局としての使命とのバランスが難しい一方、踏ん張りどころでもあると感じました。

**岡：**同じ災害報道でも、被災地のローカル局だからこそできる報道がありますよね。

**川端：**被害が出そうな地域を取材で訪れたことがあるアナウンサーなら「あそこは大丈夫だろうか？」とそこに住んでいる方々の顔を思い浮かべながら情報をお届けすることができます。青臭いことを言うようですが、ローカル局の力で頑張って伝えて、こちらの体制が万全でない時はフジテレビの力も借りながら、少しでも多くの命を救いたい。どの局もきっと同じ想いではないでしょうか。

**これまでの反省や課題を踏まえて、今後新たに取り組んでいくことを教えてください。**

**安東：**以前の安否確認システムは地震を前提にしたものだったのですが、台風や大雨が予測される前日に出社ができるかどうかを確認できるなど、より柔軟な対応ができるシステムに変更しました。運用テストも実施したのですが、社員からの返答率がなかなか100%に達しません。そこはしっかり意識を高めて、システムに慣れてもらう必要があります。そのほかにも備蓄品の見直しや配給計画、対策本部の運用訓練など、南海トラフ地震も見据えた取り組みを、全社を巻き込んで推進していきたいと考えています。

豪雨の被害現場からリポートする記者

**岡：**編成で作成している非常災害時の放送対応マニュアルも昨年大きく変更しました。番組作りの現場と共有し、発災時により迅速に動ける体制となっています。

**近藤：**制作は40人ほどの大所帯なのですが、全社的な取り組みを理解した上で、編成で作り直してもらったマニュアルの周知徹底を図りたいと思います。私たちが担っている生放送番組は地域の多くの方々に見ていただいているので、その時間帯に緊急地震速報などが出た際にどう伝えるか、今後も訓練をしっかり行っていきます。そうした姿勢を、関西テレビに対する信頼にもつなげていきたいですね。

**油野 邦彦**

制作技術局 制作技術センター 報道技術部長

これまでに数多くの災害現場を取材。今後の災害報道のあり方を探る。





## カンテレ社内見学

### 心PJと60周年PJがタッグを組んで社内見学を開催！

「カンテレ社内見学」は2007年に発足した「心でつながるプロジェクト」のメンバーが、CSR活動、メディアリテラシー活動の一環として企画立案し、2018年4月から実施しています。この社内見学は、小・中・高・大学・専門学校をはじめフリースクール、障害者施設、社会人、シニアサークルなどメディアリテラシーを学びたい人すべてを対象に、4月から3月まで43回開催され、6歳から90歳まで約900人が参加しました。最初にこの社内見学のために制作した「メディアリテラシー」と「テレビの仕事」のVTRを見て、その後「第1スタジオ」→「報道スタジオ」→「マスター」の順で見学します。見学の準備、運営、進行などは「心でつながるプロジェクト」のメンバーと放送文化推進部が中心になって進め、実施にあたっては制作部、制作技術センター、報道センター、放送部、アナウンス部、美術部はじめ多くの関係各部署の社員とグループ会社、協力会社のスタッフなど合わせてのべ約120人が携わりました。また開局60周年記念事業のひとつとして開局60周年プロジェクトのメンバーも案内役として参加し、全社的な活動として取り組んできました。「カンテレ社内見学」は体験型なプログラムを通じてメディアリテラシーについて考え、視聴者と社員が直接向き合い、相互理解を深める活動です。

詳細はコチラ

CSR推進局
放送文化推進部
**石田善久**

## 映像制作支援・学びアイ

### 10年という節目の年を迎え、新たな取り組みにチャレンジ

「学びアイ」という活動は関西テレビの現場で働く第一線の社員が学校放送部の生徒や学生、または地域のグループなど、映像制作に取り組む団体に対し、技術的サポートや企画立案のノウハウ伝授などを直接教える取り組みです。現在、活動開始当時とは映像文化や発信方法などが大きく変化していることなどを受け、今年からは以前のスタイルにプラスし、年度の総括として共につながり響き合う「まとめ支援」を取り入れました。会場となったカンテレ扇町スクエア3階のメビック扇町交流スペースには「学びアイ」に参加した高校の生徒たちと顧問の先生が集まり、それぞれの作品を鑑賞しました。コンテストやコンクール以外の環境で互いの作品をじっくり見て、意見を出し合うという貴重な機会に会場の熱気は急上昇。課題を共有し、解決方法を話しあうといった横につながり響きあう貴重な1日になりました。その後の意見交換会では最初遠慮気味だった顧問の先生も、録音の工夫や取材の許可取り、権利処理など喫緊の課題について質問しあったりするうちに、すっかり打ち解けた様子となりました。会場に駆け付けた現場の社員からも「逆に勉強になった」といった声もあがるなど、まさに「学びアイ」。これからも新しいスタイルが定着し、さらに社会の役に立つメディアリテラシー活動になっていけたらと期待しています。

詳細はコチラ

CSR推進局
放送文化推進部
**武藤良博**

# 出前授業

**2018年度の出前授業に参加した講師が集まり、授業を振り返りました。**

林 弘典（司会）
編成局アナウンス部

### 林：出前授業をやってどうでしたか？

**中畠** 最近はテレビ離れと言われていますが、テレビの面白さを知ってもらえたかなと思いますし、そのためにもすごく有効でした。

**根本** 私もテレビで働く私たちのことを知ってもらえたかなと。生徒たちが8チャンネルをつけたときに、授業に来てくれた人が作っているのかなとか思って、カンテレを身近に感じてくれるきっかけになったかと思います。

**関** 私は、子どもたちがちょっとしたアドバイスで大きく変わっていくのを見るのがとても楽しかったですね。その子の中にある能力が引き出された瞬間に立ち会えたときは、ちょっとだけその子の人生にかかわれたなと思います。

**堀田** 今の子どもたちは、以前よりは映像が身近になっていますが、自分が作るとか、送る側になるという意識はまだ希薄だと思います。今回、「作り手」の意識

とか、作るときにはよく考えた方がいいよと話したら、生徒たちは一生懸命考えて、真剣に映像作りに取り組んでくれました。この授業がきっかけで、テレビや映像の道に進む人が出てくれたらすばらしいことだし、テレビを見ているときに、こうして番組が作られているんだと思ってもらえるだけでも、メディアリテラシーとしてもよかったかなと思っています。

**神崎** 私は『報道ランナー』に出演しているのですが、生徒の前でしゃべったおじさんが番組に出ていたら「あのおじさん知っている」ということになって、コメントの伝わり方も違いますし、結果、番組を見てくれる人が増えたらいいと思いました。

### 林：皆さん自身の変化というのはありましたか。

**神崎** これまで、仕事のことや自分のことを人前でしゃべることはあまりありませんでした。今回自分を改めて振り返って、高校生のときこんなことを考えていたのかと再発見したというか、まぁまぁちゃんとした高校生だったんだと思いだしましたね。（笑）

**石田** 今回、僕は小学校5年生の授業だったのですが、放送で使う言葉は5年生でも理解できるレベルに、とよくいわれるのですが、本当に彼らに理解してもらうには、思った以上に柔らかい言葉とか、平たんな言葉を使わないと理解してもらえないことがわかりました。マラソン中継だと、「5キロのラップが」と言ったとき「ラップって何？」みたいなことになるんですよね。僕らが普段意識している以上に丁寧に説明しないと伝わっていないのかもしれないな、といい意味での反省ができました。

| 中畠義之 | 根本杏香 | 関 純子 | 神崎 博 | 堀田秀治 | 石田一洋 |
|---|---|---|---|---|---|
| コンテンツビジネス局 映画事業部 | 編成局宣伝部 | 編成局アナウンス部 | 報道局報道センター | 制作技術局制作技術センター | 編成局アナウンス部 |

### 林：今後もっとこうしたら、ということはありますか。

**石田** 今は学校単位で募集していますが、もっとオープンに募集をして、社会人も含めて、広いターゲットに参加してもらえる場があってもいいのではないですかね。

**堀田** 僕も、ターゲットを広げるのはおもしろいと思います。最近、地域とかコミュニティでも映像を使うことが、すごく広がりを見せているので。

**神崎** 僕は、記者になりたいと思っている子や、同じテーマに興味を持った子を集めて講義をするのもいいと思いますね。そうすると、もう一段高い話ができるので。

**中畠** 僕の子どもがアナウンサーになりたいと言っているんですけども、個人単位でそういう子どもが集まって、アナウンサーの話を聞くような機会があればおもしろいと思います。

**関** 生徒が運動会の実況をする学校とか、卒業式・入学式の司会をする学校で、そのサポートをしますみたいな、決まった形の中で子どもたちを指導するのがあってもいいのではないでしょうか。

**根本** 私は講師も複数で掛け合わせるような授業ができたらおもしろいかな、と思います。

### 林：出前授業に可能性を感じますか。

**中畠** ものすごく感じています。やっぱり関西テレビを知ってもらうための、一番距離感の近いものですね。

### 林：放送エリアの近畿2府4県全部へ授業に行く？

**中畠** 行きましょう！

## 11年目の挑戦 講師を立候補で募集

2018年度の特徴は、初めて派遣講師を立候補で募ったことでした。その結果、16件のうち9件が、立候補講師による出前授業となりました。

立候補理由は、「過去にその学校でドキュメンタリーを撮ったことがあった」「もともと教師という進路を考えたことがあった」というものから、「拒食症や引きこもりといった精神的な問題をかかえた子どもたちと学びの時間を共有したかった」「会社に入って学んだ編集のノウハウを活かして社会貢献できるのなら」など、多岐にわたりました。

担当教諭からは、

●仕事に対する熱意や工夫が刺激的で、将来を考えるきっかけとなった
●その後の授業がスムーズに進んだ
●講師にほめてもらったことで、生徒の自信につながった

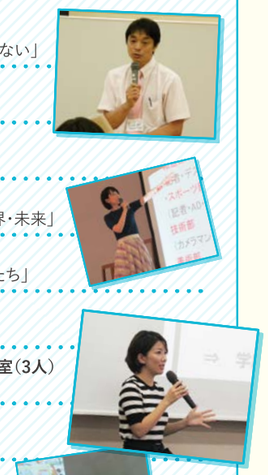
といった感想が多く寄せられました。

また、文部科学省が提唱している体験参加型講義の希望や、「世間にあまり認知されていなくてもったいない」という声もあり、2019年度以降の参考にしたいと思います。

CSR推進局
放送文化推進部
**武田直子**



| | | |
|---|---|---|
| 2018 5/17 | **大阪市立大正中央中学校（83人）** | 中畠義之 「テレビ局、こんなにおもろい仕事はない」 |
| 6/22 | **大阪府立芦間高等学校（9人）** | 山口浩史 「情報と上手に付き合うために」 |
| 7/10 | **立命館宇治中学校（165人）** | 中村隆郎 「ニュースはどのようにできるの？」 |
| 7/12 | **大阪府豊能町立東ときわ台小学校（33人）** | 竹上萌奈 「スポーツ取材でつながろう！人・世界・未来」 |
| 9/25 | **梅花高等学校（104人）** | 竹上萌奈 「女性と現場～テレビ局で働く女性たち」 |
| 9/29 | **大阪成蹊女子高等学校（81人）** | 根本杏香 「自分の夢に近づくために」 |
| 10/22 | **兵庫県立上野ケ原特別支援学校ひかりの森分教室（3人）** | 関 純子 「テレビ局について知ろう」 |
| 11/15 | **大阪府立成城高等学校（定時制課程）（30人）** | 泉谷賢一 「ニュース取材を通して考えたこと」 |
| 11/22 | **東山高等学校（80人）** | 梅田一路 「テレビ番組のつくり方」 |
| 12/6 | **大阪府立大手前高等学校（30人）** | 神崎 博 「テレビのウラ側、しゃべり倒します」 |
| 12/7 | **大阪市立塚本小学校（100人）** | 武藤 良博 「テレビ番組のつくり方」 |
| 2019 1/15 | **大津市立逢坂小学校（70人）** | 稲垣 伸 「災害報道を考える」 |
| 1/30 | **宝塚市立宝塚第一小学校（191人）** | 岡安 譲 「効果的に人に伝える方法」 |
| 2/6 | **吹田市立古江台小学校（91人）** | 稲垣 伸 「災害報道を考える」 |
| 2/15 | **京都市立勧修中学校（192人）** | 堀田秀治 「伝えたいことを考える」 |
| 2/18 | **大阪市此花区内の7小学校（330人）** | 石田一洋 「マラソン中継ってどうやってつくっているの？」 |



詳細はコチラ

## アートを身近に

### 子育て中でも障害があっても

あべのハルカス美術館で恒例となった「たまご&ひよこDAY」。小さな子どもを連れての美術鑑賞は気が引けるという方に、休館日にのびのびと楽しんでもらおうというカンテレ発案の企画。回数を重ねるごとに来館者も増え、手ごたえを感じています。

「ミラクルエッシャー展」では173人が参加しました。役割の固定化につながる「ママ」といった表現は避け、小さな子どもを育てている方を広く対象としています。

「プーシキン美術館展」を開催した国立国際美術館にはキッズルームもあり、家族で美術館を利用してもらえる機会となりました。文化振興・教育普及への貢献は美術関係者の共通の願いです。

「オットー・ネーベル展」では、視覚障害者とグループで対話しながら鑑賞する「ミュージアム・アクセス・ビュー」を実施。見えない人も見えにくい人も、対話という方法でアートに近づくことができます。そして見えている人は、その人たちからの問いによって、さまざまな発見をします。アートは誰にも開かれた人類の財産です。そのことを実感できる取り組みを続けていきます。

## 公益財団法人 関西テレビ青少年育成事業団

### リーダーは一日にしてならず

自然の中でのキャンプを通じて、子どもたちは学校とは別の仲間たちとさまざまな体験を重ねながら成長していきます。そのサポートをするのが大学生のボランティアリーダーです。彼らは子どもたちが楽しく安全にキャンプを過ごせるよう心を砕きます。大学1年の4月に応募してきた彼らは2か月の研修ののち、リーダーとしての委嘱状を受け取り、そこから本格的な活動を始めます。

その後も救急法やトレーニングキャンプなどで知識や技術を身につけながら8月には初めてキャンプ本番に臨みます。現場で先輩たちの動きを学び、子どもの心の声を聞きながら少しずつ本物のリーダーに成長していきます。

キャンプリーダーは自分の意見をはっきり言うと同時に他の人の話をしっかり聞きます。キャンプはミーティングを重ねながら作っていくので人間力が養われるのです。卒業後の進路は教育関係を含めさまざまですが、ボランティア精神にあふれ人間力にあふれた彼らが社会に出てからも周囲に良い影響を与えているのは間違いありません。これまで41年間で573人が巣立ちました。これからも事業団はより良い社会のために貢献できる若者を送り出していきます。

詳細はコチラ

事務局長
**石巻ゆうすけ**

## 認定NPO法人 児童虐待防止協会

### 関西テレビは番組やCMを通じて支援

関西テレビは1980年代から「児童虐待防止キャンペーン」に取り組んできました。1990年には児童虐待防止協会が設立され、電話相談「子どもの虐待ホットライン」が始まりました。2018年度、児童虐待防止協会への電話相談の件数は1,380件。1990年から合計61,126件の電話相談がありました。子育てに悩む母親からのSOSが主な相談内容です。協会の相談員はSOSを発信した母親に寄り添って耳を傾けます。また、協会は行政への支援や講演会を通じて、虐待問題にかかわる専門家や担い手を育てています。児童虐待は日本社会の大きな課題となっています。その解消に向けて関西テレビはこれからも協会を支援していきます。

子どもの虐待ホットライン

詳細はコチラ

#### 児童虐待問題に社会として取り組むために

昨今、5歳と10歳の女児が虐待で亡くなるなど、悲しい出来事が続いている。政府も事態を重く見て、今後4年間で2,000人程児童福祉司を増やすという。私どもの民間団体は、関西テレビから資金提供を得て、平成2(1990)年に設立した全国初の虐待防止の団体で、以降30年程続いている。当初は、電話相談をスタートさせたが、今は母親のグループ活動、研修、市区町村へのスーパーバイザー派遣など、幅広く事業を展開している。今、児童虐待は、行政が中心になって対応する仕組みが採られている。しかし、悲惨な事件からわかるように、行政だけで対応することは難しい。今後は民間、一般市民も巻き込んだ幅広い社会的支援体制づくりが急務である。

認定NPO法人児童虐待防止協会理事長
**津崎哲郎**

## 親子で抱っこ 地域で抱っこ

### 行政と警察と民間が一緒になって“虐待防止”

今回は初めて大阪市北区役所と曽根崎警察、ロータリークラブという地域の組織と共催で、“児童虐待防止”と“里親制度”の周知をテーマにしたイベントを開催しました。子どもの悲惨な虐待死がたびたびメディアで取り上げられるなど社会的関心も高まる中、イベントでは警察と行政が情報を共有して、「どうやったら虐待を防げるのか」「不幸にも虐待を受けた子どもたちをどうやって保護し、その成長を温かく見守ることができるのか」といったテーマをもとに、演劇・講演・パネルディスカッションとさまざまなアプローチがくり広げられました。関西テレビは長年にわたって児童虐待防止に取り組んできましたが、今回は新たな枠組みでの取り組みとしてそれぞれの長所を活かしたイベントとなりました。

CSRスペシャルリポート

# 関西テレビの“顔”としての責任と使命感 アナウンサーが取り組む意義とは

**アナウンス部では「カンテレアナウンサー朗読会」をはじめ、さまざまなCSR活動に取り組んでいます。地域の人との触れ合いを通して感じたことを、3人のアナウンサーが熱く語り合いました。**

## 地域の人に支えられ、育てられていることを実感する朗読会

林：朗読会、チャリティ募金、出前授業、社内見学、絵本の読み聞かせなど、アナウンサーもCSR活動に取り組む機会が増えています。とくに朗読会は17回目を迎え、認知度も上がってきました。

関：普段の仕事とは違う形で表現力を発揮できるスペシャルな活動であり、アナウンサーの“力の幅”みたいなものを感じていただける機会かなと思っています。テレビとは違う緊張感がありますよね。

大橋：舞台って違いますね。基本的に大勢の方々の前で喋ることがないので、お客さまの視線や反応がダイレクトに届く朗読会は、特に若い社員には非常に勉強になる場だと思います。

林：テレビだとある程度一方通行ですが、目の前にお客さまがいらっしゃると、やっぱり関西テレビというのは地域の皆さまに支えていただいているんだな、ということを改めて実感します。

関：毎年楽しみにしてくださっているリピーター

アナウンサー朗読会

の方々もいて、「新人だった○○さんも5年目になって成長したわね」みたいな言葉をいただくことも。大橋さんもきっと「締めの挨拶をするようになったのね」って思われてますよ（笑）。

大橋：郵便ポストの役とか、なかなか朗読させてもらえないんですけどね（笑）。確かに、お客さまに若い社員たちを育てていただいている、という感覚はあります。

関：アナウンサーが勢揃いしてひとつのイベントに取り組む機会が他にないので、部内の結束力をたかめたり、刺激し合えるというメリットも感じています。

## あの子たちが見てくれている！出前授業で再認識した会社の“顔”

関：朗読会の後のチャリティ募金も大切な活動です。FNS系列各局では毎年ひとつの国を支援していますが、関西テレビではそれ以外にも、東日本大震災や西日本豪雨の際に募金活動をしました。

大橋：地域の方々が本当に温かくて。お店で集めたお金をボトルごとそのまま持ってきてくださるなど、頭が下がる思いでした。

林：見たことのある人が募金箱を持って立っている、という親近感もあるでしょうか。アナウンサーがCSR活動をする意味は、そういうところにあるのかもしれません。

関：関西テレビを信頼していただき、この会社を通してだったら自分たちの貴重なお金もちゃんと使ってもらえるだろう、と。その会社の“顔”となっているのがアナウンサーだと思うので、私たちの責任は大きいですよ。

林：小学校や中学校では、出前授業を行っています。子どもたちとの触れ合いではどんなことを感じますか？

関：私たちの仕事にまったく興味のない子どもさんもいますが、実際の原稿を読んでもらうなど体験型の授業にすると、意外に喜んでやってくれます。今まで何チャンネルが何局かも知らなかった子どもたちが、出前授業をきっかけに「8チャンネルを見てみよう」「このアナウンサー、学校に来た人だ」と意識してくれるようになれば、ありがたいですね。

大橋：そんな風に関西テレビに興味を持って、好きになってもらうことで、10年後20年後にアナウンス部に入ってくれる子どもたちもいるかもしれません。

林：私は発声や滑舌の練習をしてもらったのですが、皆一生懸命やってくれて、その後、たくさんのお手紙をいただきました。とてもうれしかったですし、あの子たちがニュースを見てくれていると

出前授業

朗読会後に募金を呼びかけるアナウンサー

思うと、がんばらなくては！と、身が引き締まります。関西テレビの“顔”という話がありましたが、子どもたちと接することで、その意識が一層高まりました。

## 愛していただくための努力がCSR活動にさらなる広がりを生む

大橋：アナウンサーのCSR活動については、まだまだ可能性があると感じています。たとえば、高齢者施設で朗読会を行うなど、これまでの経験をベースに、さらに厚みを増した活動をしていきたいですね。

関：来場いただく朗読会は照明や音響効果も入れた大掛かりなものですが、椅子ふたつあれば手軽にできるような活動も違った良さがあります。方向性としては、支援活動もあると思います。学校や地域の催しなどで学生さんや関係者の方々が司会をされる機会がありますよね。そんな時に、司会や進行のコツ、声の出し方などをお伝えする活動です。

林：たしかに、私たちは話すことのプロですから、そうした技術的なサポートでお役に立てるかもしれませんね。お二人は、院内学級や特別支援学級にも行かれたそうですね。

関：難しい面もありましたが、先生方の熱意や子どもたちを取り巻く環境など、私たちが知らなければいけないことに触れ、社会勉強になりました。

林：大きな気づきがあるという点でも、CSR活動というのは本当に大事ですね。いつも不特定多数の方々に向けて言葉を発していますが、地域の皆さまに直に接する時こそ、私たちの真価が問われる気がします。

大橋：関西テレビをご理解いただけるよう、そしてアナウンス部を愛していただけるよう一人ひとりが努力をすること。その努力がCSR活動として地域に広がっていくよう、これからも力を合わせていきましょう。

**林 弘典**
『カンテレ通信』の司会・進行やニュース番組を担当。気象予報士、防災士などさまざまな資格を持つ。

**大橋 雄介**
アナウンス部長。プロ野球やアメリカンフットボールなど主にスポーツ中継で活躍。地域の方々に「愛されるカンテレ」をめざす。

**関 純子**
『カンテレ通信』の司会・進行を担当。CSR活動にも率先して取り組む。

## FNSチャリティキャンペーン

### 貧困・飢餓・児童労働　子どもたちの命を見つめて

FNSチャリティキャンペーンは、「世界の子どもたちの笑顔のために」をテーマに、関西テレビをはじめフジテレビ系列28局がユニセフ（UNICEF＝国際連合児童基金）とともに1974年から始めた活動です。

発展途上国の子どもたちは貧困や差別、HIV／エイズなどの問題に直面しています。そんな子どもたちを助けるために関西テレビでは支援国の文化を紹介し、その国に親しみをもってもらうイベントの開催にも取り組み、エリア・地域の皆さまから温かいご協力をいただいています。

第45回目、2018年度の支援国は「ロヒンギャ難民in バングラデシュ」でした。ロヒンギャ難民はミャンマー独立以来続き、2017年8月に始まった流出は、65万人を超える人々が50～60kmの道を歩いて避難する事態になりました。逃れた人々のうち58％が18歳未満の子どもで、

このうち60％が女性です。バングラデシュ国内でも最も貧しい地域であるコックスバザールのキャンプには100万人が逃れてきました。このキャンプを取材したリポートが、2018年5月、『とくダネ！』で放送されました。

6月には、現地取材をしたフジテレビ山中章子アナウンサーを招き、インタラクティブエリアで報告会を開催し、放送で伝えきれなかった子どもたちへの想いを伝えてもらいました。

2018年度の寄付は一般の方からの募金の他、関西テレビからは「3000人の吹奏楽」や「アナウンサー朗読会」の収益、社内にある自動販売機の手数料などを加えて、合計3,451,398円となり、全額が日本ユニセフ協会を通じてその支援に使われます。

2019年度はウガンダ共和国の子どもたちの支援に取り組みます。

詳細はコチラ

CSR推進局 放送文化推進部
**塩川恵造**

## ザ・ドキュメント

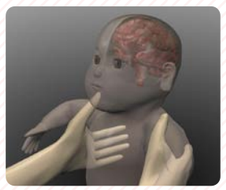
### 人に寄り添い 社会を見つめて

#### 『さくらの国に来て・・・』（7月7日）

日本で働くためにインドネシアからやってきた3人の男女。男性と女性の2人は、滋賀県の介護老人保健施設で働きながら、介護福祉士の国家資格取得を目指しています。人手不足に悩む介護施設にとっては、2人のような日本にやって来て仕事をしてくれる人たちの存在は大切になってきています。職場環境に満足しているような2人ですが、目には見えない悩みや不安を抱えています。一方、岐阜県の病院で働く女性は、10年前に看護師になるために来日しました。今では、インドネシア人の後輩の指導役として活躍していますが、子育てや病気など、異国の地で生活する難しさを痛感した10年でした。将来、労働力不足が確実視されている日本。その国で働こうと、遠い国からやってきた3人。彼らの日常に密着し、ありのままの姿を見つめ、日本の労働力問題と外国人労働者問題を考える番組でした。

#### 『ふたつの正義 検証・揺さぶられっ子症候群』（11月8日）

乳幼児が頭を激しく揺さぶられることで脳に損傷を負う“揺さぶられっ子症候群”（Shaken Baby Syndrome）。通称SBS。日本では、3徴候（硬膜下血腫・網膜出血・脳浮腫）があればSBSだと診断できるという基準があり、虐待を専門とする医師にSBS（＝虐待の疑いあり）と診断された結果、親が逮捕・起訴される事件が相次いでいます。しかし海外では、3徴候があればSBSだと診断できるという基準には医学的根拠が乏しいとされ、既に診断根拠の見直しが進んでいます。番組では、生後1ヵ月の長女を揺さぶったとして傷害罪に問われた母親の裁判に密着。母親は、過失による不慮の事故であり「罪名が違う」と訴えます。海外の状況を調査し、えん罪をなくそうと立ち上がった弁護士と法学者、子どもの命を守るため虐待をなくそうと尽力してきた医師。ふたつの“正義”とは何かを問う番組でした。



#### 『ファミリー 2人のママがいる―』（11月24日）

不妊に悩み、子どもを産みたくても産めなかった夫婦が「特別養子縁組*」で兄と妹2人の子を迎えました。妹にはダウン症がありましたが、妻の「迎えたい」という決意は揺るぎませんでした。妹の成長は、想像以上に遅く、なかなか不安は消えません。それでも家族は妹の笑顔に笑い、小さな成長を見つけては喜び合うようになりました。「産みの親」と「育ての親」がいるということ。この事実を子どもに伝えるべきかどうか、特別養子縁組で結ばれた家族が直面する悩みです。夫婦は産んだお母さんを大切にすることで、子どもたちに大きな家族を感じてほしいと願い、何を聞かれても、優しい言葉で答えます。「親子」とは何か、「家族」とは何か、を見つめた番組でした。

＊「特別養子縁組」とは、養子となる子の産みの親と法的な親子関係を解消し、実の子と同じ親子関係を結ぶ制度。

# 放送のバリアフリーを目指して

## リアルタイム字幕

### 災害時、緊急時にこそ重要となる字幕放送――

字幕放送は耳の不自由な方にも番組の内容をお伝えし、楽しんでいただくため、番組の音声を文字にして画面に表示する放送です。

関西テレビでは収録番組だけでなく、生放送番組にもできる限り字幕を付与できるよう取り組んでいます。特に災害時・緊急時には放送を通じて視聴者の方にさまざまな情報をお伝えする必要があります。そういう時にも字幕を付与できる環境・体制を構築し、災害時を想定した訓練も定期的に行っています。

生放送番組への字幕(リアルタイム字幕)を付ける

入力オペレーター3名が生放送を聞きながら文字を瞬時に入力し、指示係が後方で支援

災害時を想定した訓練の字幕放送画面

### いざ災害が発生したら――

2018年は大阪北部地震、西日本豪雨、台風21号など、多くの自然災害が発生し、関西でも大きな被害をもたらしました。

6月に発生した大阪北部地震の際には朝から多くの交通機関が運転を見合わせ、メンバーが出社困難な状況に。各々が徒歩、自転車、バイク、車など可能な方法で出社を試み、何とか災害報道特番へ字幕を付与することができました。9月の台風21号襲来時は、出社はできたものの災害報道特番を終えた頃にはほとんどの交通機関が停止し、一部メンバーは帰宅できない状況に。

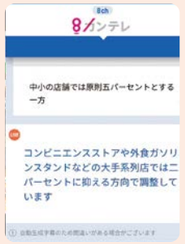
災害時、緊急時にこそ重要となる字幕放送ですが、現在の技術では無人で字幕を付与・送出することはできません。関西テレビでは災害時などでも最少人数で字幕を付与・送出できる技術や仕組みを模索し続けています。

関西テレビソフトウェア(株)
字幕制作部
**泉 元博**

## 字幕キャッチャー

### 音声認識による自動字幕生成システムで、全国24局が実証実験をしました。

テレビ画面



スマホ画面

スピーカーに「オッケーグーグル、音楽をかけて」と言うと、音楽が流れだすCMを見たことはありますか?人の話す言葉を認識する「音声認識」という技術が用いられているのですが、その音声認識でテレビ音声を文字にしてスマホへ配信する「字幕キャッチャー」システムを、在阪5局で構成する「マルチスクリーン放送協議会」が開発しました。そして全国の24放送局が字幕キャッチャーを使い、生放送での字幕配信実証実験を行いました。

生放送のテレビ字幕は、人が音声を聞いて手入力し間違ってないか確認してテレビ画面に表示するため遅れが生じます。ところが字幕キャッチャーは音声認識で文字にしてスマホへ配信するため、遅れがほとんどありません。

いいことずくめに思えますが、音声認識は間違えることが多いのです。さらに、テレビの映像とスマホの文字を交互に見るのは大変だとの声もあります。それでも、字幕が無かった番組に字幕がついたことで、聴覚障害者の方々は肯定的に受け止めてくれています。音声認識の技術は日々進化しています。近い将来、より多くの番組に字幕を付けることができるようになるはずです。

社長室 経営戦略部
**坂梨裕基**



# 自社検証番組『カンテレ通信』

## これからも視聴者の疑問に答えます

自社検証番組『カンテレ批評』とメディアリテラシー番組『テレビのミカタ』、この2つの番組を合体して生まれたのが『カンテレ通信』です。一見、アクセルとブレーキを同時に踏んでいるコンセプトのように思われるかもしれませんが、視聴者に寄り添い、作り手との相互理解を目指すという一点でこの番組は成立しています。収録番組ですが、検証番組という性質上、編集をしない完尺収録という手法をとっているため、スタジオの雰囲気は生放送と変わらない緊張感が漂い、ベテランアナウンサーの手練れた司会進行と引き出し豊かなコメンテーター2人の力に負うところが大きいのも事実です。番組の前半ではカンテレに寄せられたご意見について各部署からの回答を「視聴者対応番組制作員会」が監修し、誠実な回答とその発信に努めています。また、後半の企画コーナーでは、視聴者からの「FNS系列ってよく出てきますが、系列って何ですか?」という質問について、FNS系列をはじめとするネットワークのしくみを説明し、実際に系列局を訪問してリポートするなど視聴者の視点に立った企画内容をお伝えしています。

収録後に出演者と

『カンテレ通信』スタジオ

詳細はコチラ

劇作家・演出家
**わかぎゑふ**

『カンテレ通信』に出演するようになってから、私は少し物事を多面的に見る癖がついた。今までも演出を生業としているので、一方的な見方をしないようにしてはきたが、それが深くなったように思う。それは番組に寄せられる、あらゆるご意見に対応する局の姿勢を見てきたからだ。個人的希望だけを書いてくる人、反対にテレビ番組に感謝する人、人の目はそれぞれだ。この番組に出演するからには、自分の核になる意見に基づいて、どんな質問にも柔軟に対応していかなくてはならない。一方的な意見に隠された投稿者の本質を見抜いて、相手を認めて行く作業は実にクリエティブで楽しい。

個人的に成長させてもらったと感謝している。ありがとうございます!

同志社女子大学教授
**影山貴彦**

2016年4月より『カンテレ通信』のコメンテーターを務めている。大学教員とも、新聞・雑誌などで執筆するコラムやメディア評論の仕事とも違うコメンテーターという役割は学びが多い。関係各部の皆さまに心から感謝申し上げたい。2018年度放送のCSRファイルのコーナーの中で特に印象深いのは、FNSの系列局を訪問する「系列ってなに?」だ。番組内でもコメントしたが、今メディアに必要なのは横のつながりだと強く思っている。系列は勿論、時に系列を超えた交流が、真の社会貢献となろう。ひとつ残念なのは、「オープンスクール」が2018年から開催されなくなっていることだ。スタッフたちの多大な労力を伴うイベントではあるが、続けることによる成果もまた大きいはず。是非復活を検討いただきたいと願っている。

## 番組は全社員が共有を

番組審議会の審議内容をどう受けとめられておられるでしょうか。

テレビ局にとって番組は局存続の要であります。その番組を審議される現在の委員の皆さんは見識のある方々で本当にいいメンバーがそろった、と思っています。その座にいて私自身、各委員の発言に「そんな見方があったのか」「そういう影響が出るのか」と思いもしなかった視点に教えられることがあり、これらのことが番組の企画、制作、そして育てていくことにつながればいいが、と思うことがたびたびあります。

各委員の発言は関西テレビの番組全般に対する信号であります。このままではダメという赤色、この辺りを改めてという黄色、青色も手放しで大丈夫というサインではありません。

それぞれの色の中に隠れているメッセージを見逃さないで審議会の報告書を読んでください。皆さんは番組づくりのプロフェッショナルです。プロは往々にして他者の意見を軽視しがちという面があります。私も記者時代、現場の事情も知らないで、という不遜な考えをもったことがありました。でも、その意見がのちにこういうことを言われていたのか、と合点がいった覚えがあります。

自分を、自分たちのつくった番組を、客観的に把握することが大事であります。その姿勢がなければ番組づくりは自己満足に終わってしまいます。

番組審議会の報告内容をとらえることが自己を番組を客観視することにつながります。

委員の発言の中には制作者側の意図と違う個所、早とちりと思われる箇所があるかも知れません。しかしながらそれを無視するのではなく、なぜ、そう解釈されたのか、を考えてみることも大事かと。

インターネットの波がますます高くなってきました。広告総量がテレビに追いつきそうだ、というニュースに接するとテレビ界は安穏できないな、と審議会のメンバーとしてはいささか心配にもなります。

どうすればいいのか。妙案がないから辛いところですが、ただ言えることはいい番組を制作することです。いい番組をつくるには、企画段階から調べる、データ集めの過程で曖昧なことを除外する。つまり、地に足の着いたものの考え方、リアリズムを忘れないことではないでしょうか。

私から皆さんにお願いしたいのは、制作関連の担当部署以外の社員も番組審議会の報告書を読み、自分ならどうなのか、と考えてもらえないだろうか、ということです。

「番組を全社員が共有する」

そのことが関西テレビをさらに豊かにすることにつながると思うからです。

詳細はコチラ

関西テレビ番組審議会 委員長
上村洋行
（司馬遼太郎記念館館長）

番組審議会の様子

## オンブズ・カンテレ委員会に寄せて

2007年1月、「発掘！あるある大事典Ⅱ」の放送がきっかけとなり、VTR部分の制作を担当していた制作会社の1人の社員が、その番組だけでなく、その前に放送された番組の中で、「実験」のデータ等について「結論ありき」の不適切な番組制作を行っていたことが発覚し、関西テレビは世間の厳しい批判を受けました。オンブズ・カンテレ委員会は、この事件をきっかけに、再発防止策のひとつとして社内に設置された「活性化委員会」が、2009年に改組・改称されたものです。

活性化委員会は、①オンブズマン機能、②番組制作に携わる者の内部的自由の保障（制作現場から「駆け込み寺」としての役割）、③「特選賞」の選奨という機能に加えて、④関西テレビの再発防止策の実施状況の評価という権限を与えられました。しかし、その後の2年間の取り組みを通じて、関西テレビに対する視聴者の信頼がある程度まで回復したことから、活性化委員会は、前述した4つのうち①から③の権限をもつオンブズ・カンテレ委員会となりました。

関西テレビでは、原則として3か月に1回、オンブズ・カンテレ委員会が開催されます。委員会には社長と担当役員も出席します。委員会では、視聴者からの苦情・意見や社内の放送倫理会議で扱われた内容等について報告があり、委員は、それらについて意見を述べるとともに、必要に応じて関西テレビに改善策を求めます。2018年は、大阪北部地震（6月）、西日本豪雨災害（7月）、強風と大雨が大阪を直撃した台風21号（9月）など大きな災害が続いたので、委員会でも災害時の取材報道や災害時の対応マニュアルのあり方が検討されました。また、日々の現場で小さなミスがおきたとき、上司に積極的に報告し、その情報を社内共有することで、大きなミスの発生を防ぐことの重要性が繰り返し確認されました。

関西テレビでは、2018年、開局60周年を記念する番組やイベントが大成功に終わりました。2007年の不祥事のあと、「番組で失った信頼は、番組で取り返す」ことを目指し、さまざまな再発防止策に地道に取り組むことで、再び視聴者の信頼を回復したという経験を風化させることなく、若い社員の皆さんに伝えていくことで、関西テレビが今後もますます発展されることを期待しています。

詳細はコチラ

オンブズ・カンテレ委員会 委員
鈴木秀美
（慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所副所長 教授　大阪大学 名誉教授）

### オンブズ・カンテレ委員会 特選賞2018

オンブズ・カンテレ委員会特選賞は、社員に対して応募を呼びかけ、
社員による投票のあと、オンブズ・カンテレ委員会が審査し、決定されます。

#### 2018年の特選賞

| | |
|---|---|
| 番組・DVD部門 | 報道局報道センター：「報道ランナーSP 激動関西60年 あの衝撃ニュースの裏側」 |
| イベント・映画・その他活動部門 | 制作技術局制作技術センター：「ワイヤレスカメラコントロールシステムRimoQの開発」 |

番組・DVD部門

イベント・映画・その他活動部門

# CSR推進局のお仕事

## カンテレのCSR＝社会的責任

局長
**前田ひとみ**

他企業での「CSR」と名の付く部署の解釈はさまざまですが、関西テレビではCSR推進局として、「コンプライアンス・リスクマネジメント」「品質管理」「視聴者対応」「社会課題に取り組む」部署の集合体となっています。つまり、視聴者の声を聞き（視聴者対応）、自ら正し、自ら律し（品質管理・コンプライアンス）、予め問題に備え（リスクマネジメント）、その上ではじめて、健全な状態で、社会課題と向き合えるのだと考えています。

### 法務・コンプライアンス部

部長
**佐藤洋介**

## リスクヘッジの砦として

視聴者、番組、ビジネスパートナー、そしてカンテレグループを守るために、どうすればリスクを最大限減らせるかを考え「最後の砦」の責任を感じつつ業務にあたっています。契約書の文言からトラブル対応まで、法的根拠や過去の判例、他局の事例などを参考に、問題解決に向けてバックアップしますので、何なりとご相談下さい。法務・コンプライアンス部という名称が「とっつきにくい」「近寄りがたい」と思われていることは十分承知していますので（笑）。

### 考査部

部長
**中尾雅彦**

## 放送への信頼を守るために

言論や表現の自由は憲法で保障されているとはいえ、放送にはその公共性から一定の基準が定められています。番組の場合、台本や粗編集の段階から、人権や法令、青少年への配慮などを確認し、問題があると思えば制作現場に指摘します。一方CMでは、視聴者の身体や財産に対して損害を与える恐れもあるだけに、内容や表現に細心の注意を払います。コンテンツメーカーとしての責務、視聴者の利益を守る責任を肝に銘じながら日々の業務にあたっています。

### 視聴者情報部

部長
**斎藤康夫**

## 視聴者の期待に応える責任

視聴者からの問い合わせや意見、苦情などを電話・電子メール・郵便で受付け、それらに対して可能な限り答え、その情報を社内で共有することが主たる業務です。視聴者からの意見はその多くが番組に関するものですが、社会の変化に伴って関西テレビのあり方についての意見や苦情も見られるようになりました。私たちはそのベースにある視聴者の関西テレビへの期待をくみ取り、日々の業務にあたることがこの部署の責任と考えています。

### 放送文化推進部

部長
**稲本謙三**

## 社会課題に取り組む

関西テレビが放送や事業を通じて、どんな社会課題の解決に貢献できるかを考える部署です。私たちにできること、『カンテレ通信』や出前授業を通じてメディアリテラシーを深めること、SDGsなどの社会課題に関する講演会を開いたり、チャリティなどの社会貢献に取り組むこと。地域や子どもたちのため、そして人権を守る活動の一端を担えたらと考えています。このCSRリポート作成もその一つです。2018年、CSR推進部から放送文化推進部という名称に代わりました。

### 番組審議会事務局

事務局長
**松本 清**

## 放送法に定められた「番組審議会」の役割

「番組審議会」とは、放送番組の適正を図るために、放送法で設置が義務付けられた放送番組審議機関です。放送番組の適正向上はテレビ局の自主自立が基本ですが、客観性・妥当性を確保するために、「番組基準」「番組の種別」「放送番組の編集に関する基本計画」の設定・変更など必要事故について番組審議委員が審議し、その内容を公表することで透明性を高めます。事務局はそれをサポートし、関西テレビと視聴者の結びつきをより深めていきます。



# CSR活動 月次カレンダー

| | | |
|---|---|---|
| 2018 | 4/3 | **社内見学スタート** A<br>本社 |
| | 4/16 | **くるくる募金箱設置** B<br>インタラクティブエリア |
| | 5/3.4 | **廃棄テープアート** C<br>梅田スカイビル |
| | 5/17 | **出前授業スタート** D<br>大阪市立大正中央小学校 |
| | 5/23 | **企業のCSR実践演習**<br>龍谷大学 |
| | 6/16 | **FNSチャリティキャンペーン現地取材報告会**<br>インタラクティブエリア |
| | 6/23 | **講演会「声なき声によりそって」** E<br>なんでもアリーナ |
| | 7/15 | **祇園祭ごみゼロ作戦**<br>京都市 |
| | 7/28 | **夏休み出前授業INナレッジキャピタル** F<br>グランフロント大阪 |
| | 7/28.29 | **廃棄テープワークINナレッジキャピタル**<br>グランフロント大阪 |
| | 8/14.21.28 | **阪急阪神ゆめ・まちチャレンジ隊 社内見学**<br>本社 |
| | 9/2 | **カンテレアナウンサー朗読会vol. 17「LIFE!～新しい1ページ～」** G<br>なんでもアリーナ |
| | 10/21 | **「文楽 始めよう!!～文楽三業の役割解説ミニ公演～」** H<br>なんでもアリーナ |
| | 10/27 | **「LIFE!～新しい1ページ～」カンテレアナウンサーによる朗読会 in WACOAL STUDYHALL KYOTO**<br>ワコールスタディホール京都 |
| | 11/4 | **京大iPS細胞研究基金講演会「iPS細胞を使った新しいがん治療研究の今」** I<br>なんでもアリーナ |
| | 11/10 | **地方の時代表彰式**<br>関西大学 |
| | 11/25 | **児童虐待防止＆里親啓発イベント「親子で抱っこ 地域で抱っこ」** J<br>なんでもアリーナ |
| | 12/9 | **中学生人権作文表彰式**（大阪法務局主催）<br>阿倍野区民センター |
| | 12/22 | **キッズドリームシティ 社内見学**<br>本社 |
| 2019 | 1/27 | **大阪国際女子マラソン チャリティ募金**<br>ヤンマースタジアム長居 |
| | 1/29 | **SDGs講演会**<br>本社 |
| | 2/19 | **出前授業 講師座談会** K<br>本社 |
| | 3/27 | **「映像制作支援・学びアイ」作品鑑賞会** L<br>メビック扇町 |

A

B

C

D

E

F

G

H

I

J

K

L

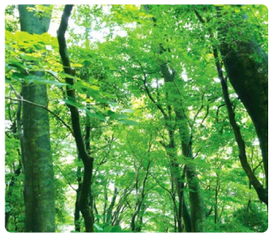
# カンテレのSDGs

## いよいよSDGsの取組みをスタート

「大阪・関西万博」のテーマでもあるSDGs(持続可能な開発目標)は、その達成を目標の一つに掲げている国連グローバル・コンパクトへフジ・メディア・ホールディングスが署名をしたこともあり、関西テレビでもそれについて学び、認識を高める機会を検討してきました。

今回は、国内の推進組織グローバル・コンパクト・ネットワーク・ジャパンの有馬利男代表理事を招いて「SDGsで何が変わるのか～カンテレが取り組むべき課題～」と題した社員向けの講演会を開催しました。

当社規模のローカル企業にできることはあるのかといった不安を持ちつつの開催となりましたが、「SDGsは意識の問題、全ての業務にはSDGsに結びつく要素がある」とのメッセージを得て、今後もSDGsを意識したCSR活動を進めていく機会となりました。



2019年1月、関西テレビ放送(以下、カンテレ)の本社を訪問して、国連グローバル・コンパクトとSDGsについてお話したところ、社員の皆さまが強い関心を示してくださったことが印象的でした。2018年からカンテレのCSRは「地域」「子どもたちの未来」「人権」の3つの柱で構成され、SDGsとのマッチングを示すようになりましたが、CSRの基本的な考え方と、目指す「ゴール」との関係が大変分かりやすくなったと感じます。カンテレは視聴者との「顔の見える関係性」を大切にしていらっしゃいますが、20年前の1999年、当時の国連事務総長であったコフィ・アナン氏は「人間の顔の見えるグローバル市場」をめざして国連グローバル・コンパクトを提唱しました。CSRとSDGsは「人間の顔」を描く作業であると言えます。今後もカンテレの描く「人間の顔」が楽しみです。

一般社団法人グローバル・コンパクト・ネットワーク・ジャパン
代表理事 **有馬利男**

### 持続可能な開発目標(SDGs=Sustainable Development Goals)

SDGsとは、2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載されている2030年までの国際目標です。持続可能な世界を実現するための17のゴール・169のターゲットから構成され、地球上の誰一人として取り残さないことを誓っています。SDGsは発展途上国のみならず、先進国自身が取り組むユニバーサル(普遍的)なものであり、日本としても積極的に取り組んでいます。

**目標1** [**貧困**]あらゆる場所あらゆる形態の貧困を終わらせる

**目標2** [**飢餓**]飢餓を終わらせ、食料安全保障及び栄養の改善を実現し、持続可能な農業を促進する

**目標3** [**保健**]あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する

**目標4** [**教育**]すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する

**目標5** [**ジェンダー**]ジェンダー平等を達成し、すべての女性及び女児の能力強化を行なう

**目標6** [**水・衛生**]すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する

**目標7** [**エネルギー**]すべての人々の、安価かつ信頼できる持続可能な近代的なエネルギーへのアクセスを確保する

**目標8** [**経済成長と雇用**]包摂的かつ持続可能な経済成長及びすべての人々の完全かつ生産的な雇用と働きがいのある人間らしい雇用(ディーセント・ワーク)を促進する

**目標9** [**インフラ、産業化、イノベーション**]強靭(レジリエント)なインフラ構築、包摂的かつ持続可能な産業化の促進及びイノベーションの推進を図る

**目標10** [**不平等**]国内及び各国家間の不平等を是正する

**目標11** [**持続可能な都市**]包摂的で安全かつ強靭(レジリエント)で持続可能な都市及び人間居住を実現する

**目標12** [**持続可能な消費と生産**]持続可能な消費生産形態を確保する

**目標13** [**気候変動**]気候変動及びその影響を軽減するための緊急対策を講じる

**目標14** [**海洋資源**]持続可能な開発のために、海洋・海洋資源を保全し、持続可能な形で利用する

**目標15** [**陸上資源**]陸域生態系の保護、回復、持続可能な利用の推進、持続可能な森林の経営、砂漠化への対処ならびに土地の劣化の阻止・回復及び生物多様性の損失を阻止する

**目標16** [**平和**]持続可能な開発のための平和で包摂的な社会を促進し、すべての人々に司法へのアクセスを提供し、あらゆるレベルにおいて効果的で説明責任のある包摂的な制度を構築する

**目標17** [**実施手段**]持続可能な開発のための実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する

# 61年目を迎えたカンテレ

関西テレビは、1958年11月の開局以来、楽しく見てもらえる番組、感動を届けられる番組、生活に役立つ情報を伝えられる番組作りなどを通して、いつも視聴者の方々に寄り添い親しまれる局になれるように取り組んできています。

お茶の間に初めてテレビがやって来たとき、大人も子どももテレビの前に集まって心躍らせ、幼い子はそんなテレビが身近にあるなかで育っていきました。テレビが視聴者の方々と空間と時間を共有していた時代です。時が経ち手軽に録画し、好きな時にテレビ番組を楽しめるようになり、さらにさまざまなコンテンツを好きな場所で好きな時間に見ることができるようなった今、テレビと視聴者の結びつきは大きく変わりました。

開局60周年の節目となった2018年度は、視聴者の方々にカンテレをより近く感じてもらえるようにという気持ちも込め、番組制作だけでなく、イベントやCSR活動に取り組んできました。これからもこうした気持ちを胸に、エリアでもっとも信頼されるテレビ局であることをめざしたいと思います。

最後になりましたがこの一年間、関西テレビのCSR活動にご理解とご協力をいただいたすべての皆さまと、本レポートにご寄稿いただいた方々に厚く御礼申し上げます。

専務取締役
CSR担当
**宮川慶一**

## 会社概要

| | |
|---|---|
| 名称 | 関西テレビ放送株式会社 |
| 本社 | 大阪市北区扇町2丁目1番7号 |
| 代表者 | 代表取締役社長　福井澄郎 |
| 設立 | 昭和33年（1958年）2月1日 |
| 開局 | 昭和33年（1958年）11月22日 |
| 資本金 | 5億円 |
| 社員数 | 580人（2019年3月31日現在） |
| 事業所 | 支社：東京<br>東京都中央区銀座5丁目15番8号 時事通信ビル12階<br>支局：名古屋 ／ 海外支局：上海<br>海外特派員：パリ、ロサンゼルス |

## 関係会社

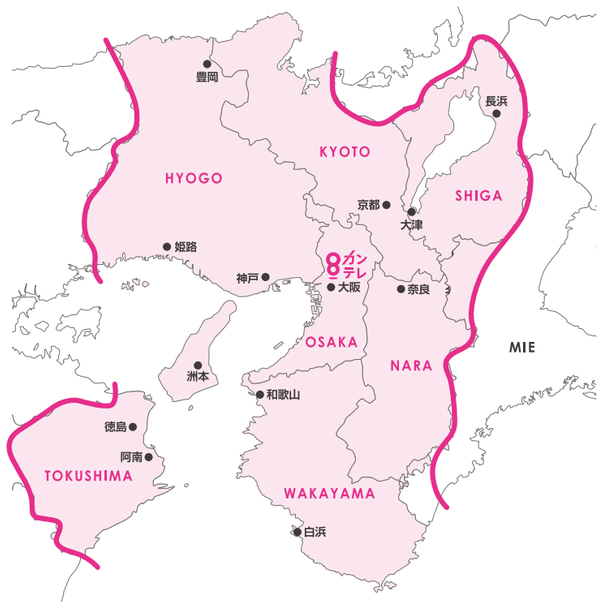
株式会社関西テレビライフ
株式会社メディアプルポ
株式会社関西テレビハッズ
関西テレビソフトウェア株式会社
株式会社レモンスタジオ
株式会社ウエストワン
株式会社セントラルテレビジョン
株式会社ウエルネスライフ

公益財団法人関西テレビ青少年育成事業団

## 関西テレビ視聴可能エリア

人口：約2171万人※ / 世帯数：約1001万世帯※
送信所：東大阪市（生駒山頂） / サテライト局：72局 / ミニサテライト局：70局

※2018年度版近畿地区テレビエリアインデックスより






**CSR REPORT 2019**
**関西テレビ放送 CSR報告書2019**

編集・発行：関西テレビ放送株式会社 CSR推進局
〒530-8408 大阪市北区扇町2丁目1番7号
☎06-6314-8888（代表）

対象期間：2018年4月1日～2019年3月31日

このリポートはホームページでも開示しています。
**www.ktv.jp/ktv/outline/csr.html**

8/カンテレ